

2018年3月4日の説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 23章 32～38節

説教 「十字架上の祈り」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

主イエスが十字架の横木を背負わされて引いて行かれたところは、「されこうべ」と呼ばれている処刑場でした。その日その場所には三本の十字架が立ち、主イエスは二人の犯罪人に左右をはさまれる形ではりつけにされたのでした。主は犯罪人の一人として死んでいかれたのです。それは主イエスがすでに予告しておられたことでした。主イエスは弟子たちと最後の食事をした時、「言うておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである」(22:37)と語っておられました。主は、苦難を負う神の僕として、捨てられる救い主として、十字架についておられるのです。

さて、ルカは十字架を取り囲む人々が口々に主イエスに投げつけた言葉をていねいに書き留めています。ユダヤの議員たちはあざ笑って、「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」と言い、兵士たちも侮辱しながら、「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ったとあります。さらには、十字架にかけられた犯罪人の一人も「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と言うのです。彼らは、立場は違っても共通して、自分で自分を救ってみろ、人を救っても自分を救えない救い主などというのはおかしいではないか、と言うのです。

この主イエスの受けられた侮辱の言葉は深刻なものです。神が本当に神であるなら、その力を見せて見ろ、苦しむ人々を救ってみせよ、お前の悩み苦しみを何とかしてもらおうがよい、それをどうすることもできない神など愛の神と言えるのか、そのような言葉に私たちもしばしば動揺するのではないのでしょうか。

このようなあざけりとのしりの声は、実は主イエスがご生涯の初めに、荒野で悪魔からの誘惑を受けられたところで聞こえてきた声とたいへんよく似ています。空腹の中で祈る主イエスに悪魔はささやきかけました、「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうか」。「人はパンだけで生きる者ではない」と主イエスが答えられると、さらに悪魔は「この国々の一切の権力と繁栄を与えるから、わたしを拝め」と言い、あるいは神殿の高い所に立たせて「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」と言うのです。これらの誘惑は、要するに、救い主とはもっと目に見えて力強く、私たちの要求に答えてくれるはずではないのか、という挑戦であり挑発です。

けれども、主イエスはそれらの誘惑を斥けて、重荷を負う人々と共に歩み、私たちの身代わりとなり、私たちのためにまことの救い主となるために、苦難を負い、いのちを捧げていかれるのです。神の子としての力を、人々を救うためにお用いになっても、自分を救うためにはお用いにならないのです。彼は自分を救わないで人々の罪を負い、自

らのいのちと引き換えに人々を救おうとされるのです。その仕上げが十字架の出来事でした。そこに私たちの思いをはるかに超えた神の知恵と力があり、私たちを救わずにおれない神の愛があらわされているのです。

主イエスは侮辱に耐えておられました。そしてそこでも祈り続けておられました。主のご生涯は祈りに貫かれていましたが、祈りは十字架の上でも止むことはありませんでした。その祈りの印象的な一言をルカは記録しています。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(34 節)。あざける人々を呪うのではなく、その人たちのためにも赦しを祈っておられるのです。

これは主イエスのご生涯を要約するような御言葉です。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ 5:44)と言われた主は、敵のただ中で、敵対する者たちのために祈られたのです。主イエスの言われる敵とは、ただ十字架を取り囲んでいた議員や兵士だけではありません。「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいた」(ローマ 5:10)とパウロが書いているように、神に逆らい、神の愛に気づかなかった私たち一人一人なのです。

「自分が何をしているのか知らないのです」と主イエスは敵対する者たちのために祈られました。この恵み深い言葉を聞くときに、しかし間違っただけとはいけないことは、知らないから罪はないのだとか、知らなかったから赦してもらえろということではありません。自分が深く隣人を傷つけたことも、国や民族が犯してきた間違いも、「知りませんでした」で済ませるわけにはいきません。知らなかったこと、知ろうとしなかったことも罪です。けれども、そのような私たちのどうしようもない無知と高ぶりと怠慢のゆえに、主イエスは十字架につかれるのです。私たちが審かれるべき自分の罪を正しく知って、しかもこの罪人が滅びることをよしとされない神の愛によって生きることができるよう、主イエスは祈り続けておられるのです。

罪の赦しは、私たちが知らないこと、知らなかったことで与えられるものではありません。私たちは無知や弱さのゆえに救われるものではありません。罪の赦しは、ただ罪なき神の独り子イエス・キリストの流された血と絶えざる執り成しの祈りによって与えられるのです。したがって私たちは、この十字架上の主イエスの祈りの言葉を、決して安っぽい恵みの言葉として聞き流してはなりません。この祈りは、無知で的外れであった私たちのための主イエスのとりなしの祈りです。と同時にこれは私たちへの「目覚めて、新しく生きよ」との語りかけではないでしょうか。この主イエスの祈りの中で、主イエスを十字架に追いやっていた自分自身に気づかされ、これまでの怠慢や傲慢をふり捨て、主イエスの招きの御言葉に従っていきたいものです。